

授業プラン（対象：小学校 4 年生以上）

2008 年 12 月 24 日 初版

2011 年 8 月 22 日 (1.3.0)

©科学的授業実践研究会



ごんぎつね

新^{にい}美^み

南^{なん}吉^{きち}

作^{さく}

年 組

名前

ご使用に当たって

この授業プラン「ごんぎつね」は、科学的授業実践研究会が提供する児童用テキストです。このプランには、いくつかの特徴があります。

このテキストは、児童への配付の際は、学習を終える毎に、一枚ずつまたはあるまつまり毎に数枚ずつ渡していきます。最初から全てのページを渡したりはしません。既にこの物語を読んで物語の筋を知っている児童も多いかと思いますが、それでも少しずつ渡していくことには意味があります。おそらくどの子ども、一枚ずつかあるまつまり毎に数枚ずつ受け取ることで、物語の展開に強く関心を寄せるようになることでしょう。

この授業プランが製本されていないのは、そもそも印刷して渡すことを前提にしているからです（バラの状態でないで印刷の時に苦勞しますね）。授業プランはA5版で提供していますが、拡大してB5版にすると更に使いやすくなります。ところで、子どもたちは、このバラのプリントを受け取って学習を進めていきますから、紛失しやすくなります。そこで、チャック付きのポリ袋を子どもたちに持たせて、それに入れさせるのも一つの方法です（ファイルよりも嵩張らず、机の中や鞆の中に入りやすいでしょう）。

このテキストでは、子どもたちに新しい学習活動を行わせる際は、その学習活動について説明をしています。それにより、指導者は学習活動の仕方について、特別に説明を付け加える必要はありません。これは、どの指導者がこのプランを利用しても、子どもたちがほぼ同じ理解に達することをめざしたものです。ですから、逆に言えば、このプランの中の説明の仕方、常に一定数の理解できない児童が出てくるとしたら、この説明の仕方、問題があることになります。そうであれば、もっと分かりやすく書き直したり、書き加えたりする必要があることになります。

授業プランは、作業付きの解説の部分と本文の部分から成り立っています。1単位の授業は、この両方で構成されます。

授業展開の原則は、

- ①意味を知る
- ②本文を読みながら書きこみをする
- ③音読をする

- ④テーマを決めて話し合いをする
- ⑤感想・意見を書く
- ⑥感想・意見を発表する
- ⑦小見出しをつける
- ⑧表現読みをする

となります。

②の書きこみは、文章をよりイメージ豊かに読む過程であり、具象化・表象化・分析の過程と言えます。④の話し合いは、②で膨らませたイメージを元に詳しく話し替えていく過程にもなります。⑤の感想・意見では、④までの学習を踏まえて、自分の考えをまとめる過程で、総合・抽象化の思考が働きます。⑦の小見出しづけでは、その場面を短く話し替えることとなります。これも総合・抽象化の思考過程です。⑧の表現読みでは、読み取ったことを、表象豊かに声に出して読むことによって、学習をまとめていきます。もちろんこれは原則的な授業の流れを示したもので、学習箇所により一部を省くことがあります。これらの授業の流れは、大きく区分すると、「ひとり読み」(①～③)と「集団読み」(④、⑥)とに分けることができます。

「ひとり読み」はひとり勉強とでも言うべきものですが、この授業プランでは、とりわけ②の書きこみは、大変重要な位置を占めます。学習を始めるに当たり、「まず初めに子どもの読みありき」なのです。書きこみを通して主体的な読みを促し、これを以後の学習のベースにしています。

「集団読み」では、特に指導者による話し合いの方向づけが重要です。ただ、指導者が子どもの発言を評価する際には注意が必要です。子どもたちが教師の反応を伺って発表するようにしてはいけません。指導者は、子どもから問題を含む発言があっても、直接のコメントを控えるのが原則です。子どもの中からそれについての発言が出てくるのを待つと良いでしょう。指導者による話し合いの方向づけとは、子どもの中から発言が出てくるように暗に導くことです。どうしても、子どもたちの話し合いの中で、解決できなくてコメントしておかなくてはならないことが残った場合は、話し合いを聞いての感想として、後で適時話をすれば良いでしょう。原則

は、子ども同士の話し合いを膨らませることです。

こうした話し合いの方向づけについては、このテキストの中ではプラン化していません。例え話し合いのテーマがあったとしても、その学級の子どもたちが、どのような順で、どのようなことを発表するかは一概に予測できないからです。この点では、授業記録による授業分析を期待します。

言葉の意味については、テキストの中で説明しています。このことにより、意味調べに要する時間を大きく節約できるようにしています。また、歴史的な事物や動植物の名前など、国語辞典の文による説明では分かりにくい言葉も、写真や図を見ることで分かりやすくなりました。

漢字の扱いについては、4年生配当の漢字には全て振り仮名を振っています。また、提供本では4年生配当の漢字を赤色で印刷しています。このことにより、4年生であれば、どの会社の教科書を使っている、また、学年のどの時期に学習しても、このプランを学習する上で、支障がないようにしています。該当漢字の取り扱いに当たっては、次の約束があります。解説と本文は別々に、初めて出てきた時の4年生配当漢字のみを対象として赤字にしています。また、振り仮名がついていても、4年生配当ではない漢字もありますが、その場合は初めて出てきた漢字でも黒色です。

『ごんぎつね』の配当時間は、教科書会社によってまちまちです（以下いずれも2005年度版）。光村図書では発表会も含めて22時間、東京書籍では16時間で活動付き、大阪書籍では16時間でその内6時間が活動、教育出版と学校図書では10時間、となっています。これらから、そもそもの文学の読みの授業としては、およそ10時間を充てていることとなります。ですが、本プランを10時間で学習することは無理でしょう。このことをどう考え、授業化するかは指導者にお任せするところですが、科学的授業実践研究会としては、活動で時間を使うよりも、基礎的な国語力を身に付けさせることに重点を置いてプランを作成しています。

このプランを学習し終えた子どもたちが、自分の言葉で考えることや、とりわけ書くことに抵抗を感じなくなることを期待します。そして、何よりも、子どもたちが学習に生き生きと参加する姿を垣間見ることができればと思います。

学習活動一覧 (全 17 時)

題名読み《p.1～2》(0.5 時)

「ごんぎつね」

思ったことを書く

【話し合い】 発表の約束

【話し合いメモ】

立ちどまり①の 1 《p.3～8》(1 時)

「これは、……お話です。」(1 文 1 行)

解説「書きこみ」

【書きこみ】

【話し合い】 茂平おじいさんについての書きこみ

【問い 1】 書きこみにおける問いかけのあり方は？

【話し合い】 「わたし」についての書きこみ

【問い 2】 と【話し合い】 「わたし」とはいつたいだれ？

解説「語り手」

立ちどまり①の 2 《p.9～14》(2.5 時)

「昔は、わたしたちの村の近くの、……いろんなことをしました。」(8 行)

言葉の意味の説明

【書きこみ】

【音読】

【話し合い】 なぜいたずらばかりしたのでしょうか？

【話し合いメモ】

解説「感想・意見」(「立ちどまり」)

【感想・意見】 と【話し合い】

解説「小見出し」

【小見出し】 立ちどまり①

【小見出しの発表】

立ちどまり② 《p.15～18》(1 時)

「ある秋のことでした。……ぬかるみ道を歩いていきました。」(9 行)

解説「読みの記号」

言葉の意味の説明

【書きこみ】

【音読】

【感想・意見】と【話し合い】

【小見出し】

【小見出しの発表】

立ちどまり③《p.19～25》(1.5時)

「ふと見ると、川の中に……川上の方へかけていきました。」(14行)

言葉の意味の説明

【書きこみ】

【音読】

【話し合い】兵十について(「何々のところで」を付けて発表)

【感想・意見】と【話し合い】

【小見出し】

解説「書きこみの種類を広げよう(〈前と関係づけて〉〈予想〉)」

立ちどまり④《p.26～30》(1時)

「兵十がいなくなると、……草の葉の上のにせておきました。」(18行)

言葉の意味の説明

【書きこみ】

【音読】

【話し合い】

《テーマ1》ごんのいたずらについての書きこみ

《テーマ2》ごんと兵十のあいだに起こる予想の書きこみ

【感想・意見】と【話し合い】

【小見出し】

立ちどまり⑤《p.31～34》(1時)

「十日ほどたって、……兵十のうちのだれが死んだんだろう。」(13行)

言葉の意味の説明

【書きこみ】

【音読】

【感想・意見】と【話し合い】

【小見出し】

立ちどまり⑥《p.35～40》(1.5時)

「お昼がすぎると、……あんないたずらをしなけりゃよかった。」(19行)

言葉の意味の説明

【書きこみ】

【音読】

【話し合い】

《テーマ1》あなの中で考えたことについての書きこみ（「何々のところで」「だれだれさんが言った何々のことで」）

《テーマ2》これまでのごんと「関係づけて」、これからのごんについての「予想」

【感想・意見】と【話し合い】

【小見出し】

解説「音読と表現読み」

【表現読み】(立ちどまり⑥)

立ちどまり⑦《p.41～45》(1時)

「兵十が、赤い井戸の所で、……まず一つ、いいことをしたと思いました。」(18行)

以後、言葉の意味の説明は文中で

【書きこみ】

【音読】

【話し合い】ごんが「うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをした」と思ったことについての書きこみ（と「だれだれさんが言った何々のことで」）

【感想・意見】と【話し合い】

【小見出し】

【表現読み】(立ちどまり⑦)

立ちどまり⑧《p.46～49》(1時)

「次の日には、ごんは、……松たけも二、三本、持っていきました。」(15行)

【書きこみ】

【音読】

【感想・意見】と【話し合い】

【小見出し】

【表現読み】(立ちどまり⑧)

立ちどまり⑨《p.50～57》(1.5時)

「月のいいばんでした。……ひきあわないなあ。」(43行)

【書きこみ】

【音読】

【話し合い】「ひきあわないなあ」と思ったごんの次の日からの行動の予想(そう考えた理由をこれまでのお話の中から見つけて)

【感想・意見】と【話し合い】

【小見出し】

【表現読み】(物語の初めから)

立ちどまり⑩《p.58～62》(1.5時)

「その明くる日も、……つつ口から細く出ていました。」(18行)

【書きこみ】

【音読】

【話し合い】「ぐったりと目をつぶったまま、うなずいたごとと、火なわじゅうをばたりと、とり落とした兵十について(「何々のところで」「だれだれさんが言った何々のことで)」

【感想・意見】と【話し合い】

【小見出し】

【表現読み】(立ちどまり⑩→物語の初めから)

まとめ《p.63～66》(2時)

解説「全文感想・意見と副題つけ」

【副題つき全文感想・意見】

【友だちの「全文感想・意見」を読んでの感想・意見書き】

このテキストに出てきた4年生の漢字(1)(2) p.67～68

【話し合い】

前のページで書いたことを発表しましょう。

ただし、このお話を読んだことがあって、④について書いている人は、この④の部分だけは発表しないようにしましょう。友だちから読む楽しみをうばうことになるからです。

発表の^{やくそく}約束

グー：だいたい同じ、同じ、つけたし、そうだと思うとき

チョキ：それはちがうぞ、こう考えることもできるぞと思ったとき

パー：話題を^か変えたいとき、^{べつ}別のことで発表したとき

発表の約束にしたがって発表しましょう。^{さいしょ}最初はみんなパーから始めます。

【話し合いメモ】

心に^{のこ}残っただれか一人の発表を書きとめておきましょう。

書きこみ

お話を読む時に、^{ぎょう}行と^{ぎょう}行の間などに言葉や線などを書き入れることを、「書きこみ」といいます。書きこみをすると、考えたことや思ったことをメモにして残しておくことができます。

さっきは、「ごんぎつね」という短い言葉だけで、たくさんのことを考えましたね。文の中にはたくさん言葉があるのですから、そのひとつひとつの言葉について考えると、いくらでも考えがうかんできます。その頭の中にうかんできた言葉を文字にして書いていくのです。たくさん書きこみをしようとする人ほど、頭をかしこくすることができます。

次のページの「書きこみをするときの注意」をよく読んでから、「書きこみ」にちょうせんしてみましよう。

書きこみをするときの注意：

- ① 言葉の横に線を引くときには、言葉の右に線を引きます。また、言葉全体を丸でかこんでもいいです。
- ② 言葉を書きこむときには、引いた線の右側から書き始めるようにします。書ききれないときには、左側も使ってもいいです。

これは例^{れい}です。

こんなふうに言葉の右に線を引いて、その線の右に自分の言葉を書きこみます。

これから始まるこの物語のことだな。

これは、わたしが小さい時に、村の茂平^{もへい}というおじいさんから聞いたお話です。

たったの1行の文なのに、たくさん書きこみができたこと
でしょう。

さて、この文の中に「^{もへい}茂平」というおじいさんが出てきます。
あなたは、茂平おじいさんについて、どんな書きこみをしま
したか。

【話し合い】

「発表の約束」にしたがって手を上げて発表しましょう。

みんなの発表を聞いていると、大きく2つの^{しゅるい}種類に分けることができます。

ひとつは、「茂平というおじいさんはどんな人かな？」というように自分に問いかけて終わっているものです。

もうひとつは、上のように問いかけた後で、自分の想ぞうした答えを書いているものです。

【問い1】

あなたは、どちらの方がよいと思いますか。

ア 自分に問いかけて終わる。 () 人

イ 自分が想ぞうした答えも書く。 () 人

実は、書きこみで、問いかけをする時に大切なのは、イのように答えも書くことです。まずアのように自分に問いかけて、イの部分を書くということです。

ですから、これからは、自分に問いかけて終わるのではなく、自分の問いかけに対して、自分の想ぞうや考えなどを書くようにしましょう。

では、自分の書きこみをもう一度見直して、問いかけて終わっている所は、そこに自分の想ぞうした答えも書き^{くわ}加えておきましょう。

【話し合い】

ところで、「わたし」についての書きこみをした人はいませんか。「発表の約束」にしたがって手を上げて発表しましょう。

【問い2】

さて、「わたし」とはいっただれなのでしょう。考えを整理しておきましょう。

ア ^{もへい}茂平おじいさん () 人

イ ^{にい み なんきち}新美南吉 () 人

ウ その他 () () 人

【話し合い】

【問い2】について話し合みましょう。

語り手

茂平おじいさんから「わたし」がお話を聞いたのですから、「わたし」は茂平おじいさんではありません。ですから、アはまちがいです。

では、「わたし」は新美南吉さんなののでしょうか。だとすると、子どもころの南吉さんの村には、茂平おじいさんが実さいに住んでいたことになります。そうだったのでしょうか。

このような物語は、ふ通、作者が頭の中で考えた「人物」や「生き物」や時には「物」に話をさせます。この「人物」や「生き物」や「物」もふくめて、お話を作るのが作者の物語作りの仕事なのです。

ですから、新美南吉さんは、自分が子どもころに、自分が住んでいた村に茂平おじいさんがいなくても、まただれからもこのお話を聞いたことがなくても、この『ごんぎつね』というお話を自由につくり出すことができるのです。

物語を作る作者が、頭の中で作った「人物」などに話をさせるとき、この「人物」などのことを「語り手」と言います。

お話の**つづ**きを、書きこみをしながら読み進みましょう。その前に、下の言葉の意味を見ておくと、分かりやすくなります。

①しだ



この写真の植物の名前

②^{なたね}菜種から



^{なたね}菜種とは、「アブラナ(^な菜の花)」の種のことです。^{なたね}菜種がらとは、じゆくした種(^{なたね}菜種)をはたき落としたあとの^なくきなどの部分で、もえやすいので、かまどに火をおこす時のたきつけなどに使いました。種の方はしぼって

^{なたね}菜種油 (昔は主に明かりをとすのに使った) にします。

③とんがらし

とんがらしのこと



昔は、わたしたちの村の近くの、中山なかやまという所に、小さなおしろがあつて、中山様というおとの様がおられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、^①しだのしだ一ぱいしげった森の中に、あなをほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、^②辺あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へついてもほり散ちらしたり、^③菜種なたねがらのほしてあるのへ火をつけたり、百しよう家やのうら手につるしてあるとんがらしをむしり取っていたり、いろんなことをしました。

感想・意見

ここまでのお話のくぎりを「立ちどまり①」とよぶことにします。この立ちどまり①を書きこみをしながら読んでみて、どうでしたか。

書きこみは、主に文章にそってくわしく読んでいき、直せつ書かれていないことまでも読み取ってイメージをふくらませていくことですが、今度は、そのぎゃくに文章から考えたことをまとめてみましょう。

ただし、まとめるといっても、あらすじを書くのではありません。読み取ったことに自分の考えを入れてまとめるのです。

例えば、「ごんのいたずらについて」とか「ひとりぼっちのごんについて」というように書く内ようを決めて、自分の考えを書いていきます。

お話の初めから終わりまでの全てについて書くのではありません。ある場面やある事がらだけを取り出して書くのです。

その書く中身は、自分が最も言いたいことであったり、大切だと考えたことであったり、心を動かされたことであったりします。

さあ、立ちどまり①の「感想・意見」にちょう戦してみましょう。

小見出し

「小見出し」は、立ちどまりごとの題のようなものです。小見出しを見ただけで、書かれている内ようがわかるように書きます。

小見出しは、短い言葉ではなくて、短い文にするとよいでしょう。

例えば、「うさぎとかめ」は短い言葉ですが、「うさぎとかめは、かけっこをしてかめが勝った。」と書けば短い文になります。こんなふうには書けば、書かれている内ようがよくわかるようになります。

【小見出し】

では、立ちどまり①に小見出しをつけてみましょう。

小見出しを発表しましょう。

読みの記号

言葉や線などで書きこみをする時に、もう少しくふうをしてみましよう。書きこみをする時に、記号を使うようにするのはです。そうすれば、次のような良い点があります。

一つは、書きこむ時に、どの記号になるか考えることで、毎回書きこむ内しゅるいのような種類を考えることになり、いろいろな種類の書きこみができるようになる点です。

もう一つは、後で見直す時に、ひと目で書きこんだ内ようがわかるようになる点です。

記号は、ひつよう必要な種類と数だけ、ひとりひとりが考えて作ると良いでしょう。

例えば、ごんに言いたいことを書くときの記号は㊦にするといったぐあいです。また、「ひとりぼっち」という言葉を読んで「なぜかな？」と思ったら、㊦という記号を使って、その後その後に自分の考えを書くといいでしょう。

でも、いつでも記号をつけなくてはならないわけではありません。つけにくい書きこみがあったら、はぶいてもよいのです。

では、お話を読み進みましょう。できるだけ「読みの記号」をつけながら、書きこみをしていきましょう。

①もず



^{こんちゅう}昆虫やカエルなどをとって食べる鳥。たまにカエルなどが小枝にささっているのを見かけますが、これはモズがしたのです。いろいろな鳥の鳴き声をまねたようなふくぎつな鳴き方をします。スズメやツバメより少し大きい鳥です。

②つつみ

川などの岸にそって土を高くもり上げたもの。^{どて}土手。

③すすき



④しづく

ここでは、水のつぶのこと。

⑤ただのときは

いつもは。ふ通のときは。

⑥はぎ



⑦^{かわしも}川下

川の水が流れていく方向。

⑧ぬかるみ

地面の土がどろどろになっているじょうたい。

ある秋のことでした。二、三日雨がふり続いたその間、あいだごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました。

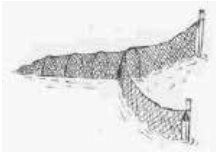
雨が上がると、ごんは、ほっとしてあなからはい出ました。空はからっと晴れていて、^①もずの音がきんきんひびいていました。

ごんは、村の小川の^②つつみまで出てきました。辺りの^③すすきのほには、まだ雨の^④しずくが光っていました。川は、いつもは水が少ないのですが、三日も雨で、水がどつとましていました。^⑤ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、^⑥はぎのかぶが、黄色くにごった水に横だおしになって、もまれています。ごんは、^⑦川下の方へと、^⑧ぬかるみ道を歩いていきました。

①まくし上げる

上の方へ引き上げる。まくり上げる。

②はりきり



大雨がふった後に池から落ちてくるウナギをとるためのあみ。ふ通は「待ちあみ」と言いますが、川はばいっばいにはりきって使うため、「はりきりあみ」とよんでいました。

③しばしば (芝)

しばふ しば 芝生の芝のこと。『権狐』の元の文は、この「芝」という漢字を使っています。これに対して、「柴」は、野山に生えているしば小さな木のことで、ひとつの木の種類ではなくて、いろんな小さな木をまとめて言う言い方です。

④きす

「キス」という魚がありますが、それは海にすむ魚です。ここでは、コイやフナではない何種類かの川にすむ魚をまとめて「きす」と言っています。

⑤びく

とった魚を入れておく入れ物。竹をあんだ物やあみや箱を使って作った物などがあります。

⑥川上かわかみ

川の水が流れてくる方向。川下のかわしも反対側。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうっと草の深い所へ歩いて行って(南吉の元の文)歩きよって、そこからじっとのぞいてみました。

「ひょうじゅう兵十だな」と、ごんは思いました。兵十は、ぼろぼろの黒い着物を①まくし上

げて、②こしのところまで水にひたりながら、魚をとる。はりきりというあみをゆすぶっていました。はちまきをした顔の横つちように、まるいはぎの葉が一まい、大きなほくろみたいにへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきりあみのいちばん後ろの、ふくろのようになつたところを、水の中から持ち上げました。その中には、③しばの根や、草の葉や、

くさった木ぎれなどが、ごちやごちや っ
 っていました。でも、ところどころ、
 白いものがきらきら光っています。それは、
 太い・うなぎのはらや、大きな^④きす
 のはらでした。兵十は、^⑤びくの中へ、
 そのうなぎやきすを、ごみと一しよにぶ
 ちこみました。そして、また、ふくろの口をしばって、
 水の中へ れました。

兵十は、それから、びくを持って川から上がり、
 びくを土手^{どて}に^お置いといて、
 何をさがしにか、^⑥川^{かわ}上^{かみ}の方へかけていきました。

【音読】

立ちどまり③を音読しましょう。1回目だけ立って読んで、2回目からはすわって読みます。何回も声を出して読みます。

【話し合い】

「兵十について」話し合しましょう。あなたはどんな書きこみをしていますか。

発表するときには、「何々のところで」というように文を読んでから、兵十について発表しましょう。

例えば、「ぼろぼろの黒い着物」の横に線を引いて書きこみをしている場合は、

「ぼろぼろの黒い着物 のところで、兵十はびんぼうなの
かもしれないと思いました。」

というように発表します。

書きこみの種類を広げよう

書きこみがたくさんできるようになりましたか。また、読みの記号の種類もふえましたか。ためしに、立ちどまり③で使った読みの記号の種類を数えてみましょう。

読みの記号の種類の数 () 種類

ここで、新しい読みの記号をしょうかいします。

- ① 前と^{かん}関係づけて
- ② 予想

この2つの読みの記号は、どんなときに使うのでしょうか。

あなたは、立ちどまり③の最後の文を読んだとき、何かを感じたのではないのでしょうか。

「兵十は、それから、びくを持って川から上がり、びくを土手に置いといて、何をさがしにか、川上の方へかけていきました。」

兵十は「(魚が入った) びくを土手に^お置く」「(そこから) かけていく」……そう、兵十は大切なものを置いたままいなくなるのです。それをごんが見ているのです。何か起こりそうです。あなたは、ごんがいたずらをするのではないかと予想します。

では、なぜあなたはそのように思うのでしょうか。それは、立ちどまり①で、ごんがいたずらばかりしていることをよく知っているからです。つまり、前に読んだことと「関係づけて」読んでしまったのです。そして、またいたずらをするのではないかと「予想」したのです。

この例の場合は、「関係づけ」と「予想」とは、ほぼ同時に頭の中にかんだことなので、記号を2つならべて書きこみをするのもよいでしょう。

他の場合には、主に前のことを思い出したのならば「関係づけ」だけの記号を使い、**特**^{とく}に前のことと関係づけて考えたのではないけれども、先のことを考えたのなら「予想」の記号だけを使って書きこみをするのもよいでしょう。

実は、物語を読むということは、いつも前に読んだことをふり返りながら（「前と関係づけて」）、次がどうなるのかを楽しみにしながら（「予想」）読み進んでいるのです。

これからは、この2つの読みの記号も使いながら読み進むようにしましょう。

①^{しもて}下手

川の水が流れていく方。^{かわしも}川下の方。

②じれったい

しようとする事がなかなか思うようにならなくて、いら
いらした気持ちになること。

③ぬすと

ぬす^{びと}人。どろぼう。

④はんの木

川ぞいなどの水^{みず}べに生える木です。昔、田んぼのあぜ（細
い道）に植えて、イネをほすためのさおをかける木として使
われていました。10～20メートルの大きさの木です。



兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなつたのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきりあみのかかっている所より①しもて下手の川の中を目がけて、ぽんぽん投げこみました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごつた水の中へもぐりこみました。

いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、なにしろ、ぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんは、じれ②ったくなつて、頭をびくの中につつこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツといつてごんの首へまきつきました。そのとたんに、兵十が、こうから、

「うわあ、ぬすどぎつねめ。」

どどなりたてました。ごんは、びっくりしてとび上がりました。うなぎをふりすててにげようとしたが、うなぎは、ごんの首にまきついたままはなれませんでした。ごんは、そのまま、横つとびにとび出して、一生けん命に、にげていきましました。

ほらあなの近くの、はんの木の下で、ふり返ってみましたが、兵十は追っかけてはきませんでした。

ごんは、ほつとして、うなぎの頭をかみくだき、やつとはずして、あなの外の、草の葉の上のせておきました。

【音読】

立ちどまり④を音読しましょう。1回目だけ立って読んで、2回目からはすわって読みます。何回も声を出して読みます。

【話し合い】**《テーマ1》**

「ごんのいたずら」について話し合しましょう。あなたはどんな書きこみをしていますか。

発表するときには、「何々のところで」というように文を読んでから、ごんのいたずらについて発表しましょう。

《テーマ2》

ごんは兵十にいたずらをしたのですが、これからごんと兵十のあいだに何かが起こるのでしょうか。もしこのことについて、「予想」の書きこみをした人がいたら、発表しましょう。

なお、このお話の続きを知っている人は、友だちの発表を聞いてみましょう。

①家内^{かない}

つま。おくさん。

②おはぐろ

歯をそめるもの。黒い色をしています。昔の村では、祭り、結こん式、そう式など特別な場合^{とくべつ}に歯にお歯黒^{はぐろ}をつけました。

③かじ屋

鉄などを熱^{ねっ}してやわらかくし、金づちでたたいてほうちょうなどを作る人。

④かみをすく

かみをくしなどでとくことです。竹で作った歯の細かいすきぐしというものがあり、これにかみをすいて、あかを取りました。

⑤のぼり



細長い布のはしにいくつも輪^わがついていて、その輪にさおを通して立てて使うはた。

⑥よそ行き^ゆの着物

家からよそへ行くときに着る服で、ふだん着ている服ではない少しよい服。

十日ほどたって、ごんが、弥助やすけというお百しようのうちのうらを通りかかり

ますと、そのの、いちじくの木のかげで、弥助の①家内かないが、おはぐろ②をつけて

いました。③かじ屋しんべえの新兵衛えのうちのうらを通ると、新兵衛の家内が、④かみを

すいていました。ごんは、「ふふん、村に何かあるんだな。」と思いました。

「なんだろう、秋祭りかな。祭りなら、たいこや笛の音がしそうなものだ。それにだいいち、お宮⑤のぼりが立つはずだが。」

こんなことを考えながらやって来ますと、いつのまにか、表に赤い井戸いどのある、兵十のうちの前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大ぜいの

人が集まっていた。よそ行き^⑥の着物ゆを着て、こしに手ぬぐいを下げたりし

た女たちが、表のかまどで火をたいています。大きなべの中では、何かぐずぐずにえています。

「ああ、そう式だ。」と、ごんは思いました。

「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」



①^{ぼち}墓地

おほかのあるところ。

②^{ろくじ}六地ぞう (左上の写真)

地ぞうが6体ならんでいます。六地ぞうは、^{たい}墓地の入口などに置かれていることがあります。

③ひがん花 (右上の写真)

④そう列 → そう式の行列のこと。

⑤かみしも (右の写真)

漢字では、ころもへん(衤)に上下と書いて^{かみしも}「袴」と書きます。上下がセットになった服です。おそう式や結こん式など特別な時に着ます。



写真では一つに見えますが、上下に分かれます。

⑥位はい (右下の写真)

文字を書いた木の板。なくなった人の名前などが書かれています。

⑦ささげる

両手に持って目の高さより上にあげること。

⑧とこにつく

「とこ」とは、ねどこのこと。「とこにつく」とは、「ねどこに入る」という意味と「病気になってねる」という2つの意味があり、ここでは「病気になってねる」という意味です。



お昼がすぎると、ごんは、村の墓地^①へ行って、六地^②ぞうさんのかげにかく

れていました。いいお天気で、遠く ころには、おしろの屋根がわらが光つて

います。墓地には、ひがん花^③が、赤いきれのようにさき続いていました。と、

村の方から、カーン、カーンと、かねが鳴ってきました。そう式の出る合図^{あいず}です。

やがて、白い着物を着た^④ そう列の者たちがやってくるのが、ちらちら見え始

めました。話し声も近くなりました。そう列は墓地へ ってきました。人々が通っ

たあとには、ひがん花がふみ折^おられています。

ごんは、のび上がって見ました。兵十が、白い^⑤ かみしもを着けて、位^⑥はい

を^⑦ささげています。いつもは、赤いさつまいもみみたいな元氣のいい顔が、今日

はなんだかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつ母だ。」
かあ

ごんは、そう思いながら、頭をひっこめました。

そのばん、ごんは、あなの中で考えました。

「兵十のおつ母は、^⑧とこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから、兵十は、おつ母にうなぎを食べさせることができなかった。そのまま、おつ母は、死んじやったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思ひながら、死んだんだらう。ちよつ、あんないたずらをしなけりやよかった。」

【音読】

立ちどまり⑥をいつもと同じように音読しましょう。

【話し合い】**《テーマ1》**

ごんは、そのばん、あなの中で考えますが、このことについて話し合いましょう。あなたはどんな書きこみをしていますか。

発表するときには、「何々のところで」というように文を読んでから、書きこんだことを発表しましょう。

また、今回は、友だちの発表を聞いて、自分が思ったことや意見もたくさん言うようにしましょう。

その時は、「**だれだれさんが言った何々のことで**」と言ってから、自分の思ったことや意見を言うようにしましょう。

《テーマ2》

ごんは「ちよっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」と思いますが、これまでのごんと「関係づけて」、**これからのごん**についての「予想」を話し合いましょう。

なお、このお話の続きを知っている人は、友だちの発表を聞いていきましょう。

おんどく ひょうげん
音読と表現読み

音読は文字を追って読む読みです。一語一語はっきりと声を出して読みます。まずは、自分が文字を正かくに読めるかどうか大切です。

ところが、書きこみや話し合いや感想・意見出しをした後で、もう一度同じところを読んでみると、同じ文章のはずなのに感じ方がちがっていることに気づきます。

それはなぜなのでしょう。

実は、同じ言葉、同じ文章を読んでも、今度は、書きこみや話し合いや感想・意見出しをしたことが、次々と頭の中にうかんでくるからです。

このように いろいろなことを頭の中にゆたかに思いうかべながら、声に出して読むことを「**表現読み**」^{ひょうげん}と言います。

「表現読み」では、自分が物語を味わいながら読みます。そして、自分になっ^{とく}得するように読んでいきます。だれかに聞いてもらうことを主な目的にはしていません。自分の中に聞き手がいて、その聞き手に読んで聞かせているのです。ですから、分かりにくいところや、ゆっくり味わいながら読みたいところでは、少し間^まをとってから次を読み進むこともできます。

音読では、だいたい同じ速さですらすら読むことが多いのですが、表現読みでは読む速さは問題ではありません。表現読みをしているときは、どちらかという、ゆっくり読んでいる人ほど、文章をゆたかに楽しみながら読んでいることになります。

それでは、立ちどまりの⑥の「表現読み」にちょう戦しましょう。初めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。

兵十が、赤い井戸の所で、麦をといでいました。

兵十は今まで、おつ母と二人ふたりきりで、まずしいくらしをしていたもので、おつ

母が死んでしまつては、もうひとりぼっちでした。

「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」

「なや」とは…農家などで、農具うぐなどを入れておくための小屋をいう。漢字では「納屋」と書く。

こちらの^①物置南吉の元の文では「なや」となっている。これから後に出てくる「物置」も、すべて元の文ではの後ろから見ていたごんは、そう思いました。
「なや」である。

ごんは、物置のそばをはなれて、こうへ行きかけますと、どこかで、いをしを売る声がします。

「いわしの安売りだあい。^②とれてまだ新しい、生きのいい、いわしだあい。」

ごんは、その、^③活気かっきがある元気な、いせいのいい声のする方へ走つていきました。と、やすけ弥助の

④ つま おくさん

おかみさんが、うら戸口とぐちから、

「いわしをおくれ。」

と言いました。いわし売りは、いわしのかごを積つんだ車を道ばたに置いて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持って りました。ごんは、そのすきまに、かごの中から五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十のうちのうら口から、うちの中へいわしを投げこんで、あなへ かってかけもどりました。とちゅうの坂の上でふり返ってみますと、兵十がまだ、井戸のところまで麦をといでいるのが小さく見えました。ごんは、うなぎの⑤ つぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

⑤ 悪いことをしたことに對してのうめ合わせ

【音読】

立ちどまり⑦をいつもと同じように音読しましょう。

【話し合い】

ごんは、「うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをした」と思ったのですが、あなたはどう思いますか。

そのことについて、書きこみをしている人がいたら、初めに発表しましょう。

また、書きこみをしていない人も、友だちの発表を聞いて、自分が思ったことや意見もたくさん言うようにしましょう。

その時は、「**だれだれさんが言った何々のことで**」と言ってから、自分の思ったことや意見を言うようにしましょう。

【話し合い】

感想・意見を発表し合いましょう。

【小見出し】

【表現読み】

立ちどまり⑦の表現読みをしましょう。初めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。

次の日には、ごんは、山でくりをどっさり拾って、それをかかえて、兵十のうちへ行きました。うら口からのぞいてみますと、兵十は、昼飯めしを食べかけて、茶わんを持ったまま、ぼんやりと考えこんでいました。変へんなことには兵十のほつぺたに、かすりきずがついています。どうしたんだらうと、ごんが思っていますと、兵十がひとり言を言いました。

「いったい、だれが、いわしなんかを、おれのうちへほうりこんでいったんだらう。おかげで、おれは、ぬす人ひとと思われて、いわし屋のやつに、ひどいめにあわされた。」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまった、と思いました。「かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんなきずまでつけられたのか。」

ごんはこう思いながら、そっと物置の方へ回って、そのり口に、くりを置いて帰りました。

次の日も、その次の日も、ごんは、くりを拾っては、兵十のうちへ持ってきてやりました。その次の日には、くりばかりでなく、まつ松たけも二、三本、持っていききました。

【話し合い】

感想・意見を発表し合いましょう。

【小見出し】

--

【表現読み】

立ちどまり⑧の表現読みをしましょう。初めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。

月のいいばんでした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。中山様のおしろの下を通って、少し行くと、細い道のこうから、だれか来るようです。話し声が聞えます。チンチロリン、チンチロリンと、松虫が鳴いています。

ごんは、道のかた側がわにかくれて、じっとしていました。話し声は、だんだん近くなりました。それは、兵十と、加助かすけというお百しようでした。

「そうそう、なあ、加助。」

と、兵十が言いました。

「ああん？」

「おれあ、このごろ、とても、不思議ふしぎなことがあるんだ。」

「何が？」

「おっ母が死んでからは、だれだか知らんが、おれに、くりや松たけなんかを、毎日毎日、くれるんだよ。」

「ふうん、だれが？」

「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに置いていくんだ。」

ごんは、二人のあとをつけていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。そのくりを見せてやるよ。」

「へえ、変なこともあるもんだなあ。」

それきり

① それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助が、ひよいと後ろを見ました。ごんは、びくつとして、小さくなつて立ち止まりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさつさと歩きました。

吉兵衛きちべえというお百しようのうちまで来ると、二人は、そこへ っていきました。

左下の写真

ポンポンポンと、^②木魚もくぎよの音がしています。まどのしようじに明かりがさし

ていて、大きなぼうず頭がうつつて動いていました。ごんは、「お念仏ねんぶつがあるん

だな。」と思ひながら、井戸のそばにしゃがんでいました。し

ばらくすると、また三人ほど人が連れだつて、吉兵衛のうちへ

つていきました。おきようを読む声が聞こえてきました。



ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、またいっしょに帰っていきます。ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついて

いきました。兵十の ^③ かげのこと かげぼうしをふみふみ行きました。

おしろの前まで来た時、加助が言いました。

「さっきの話は、きつと、そりゃあ、神様の仕わざだぞ。」

「えっ？」

と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神様だ、

神様が、お前がたった一人になったのを、あわれに思わっしやって、いろんな物をめぐんで下さるんだよ。」

「そうかなあ。」

「そうだとも。だから、毎日、神様にお礼を言うがいいよ。」

「うん。」

ごんは、「へえ、こいつはつまらないな。」と思いました。「おれが、くりや松たけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼をいうんじゃないか、おれは、^④ひきあわないなあ。」

ひきあう↓苦勞や努力をしただけのことがある。

【音読】

立ちどまり⑨をいつもと同じように音読しましょう。

【話し合い】

ごんは、「ひきあわないなあ」と思います。次の日から、ごんはどうするのでしょうか。「予想」を出し合いましょう。

予想を言うときには、そう考えた理由をこれまでのお話の中から見つけて言うようにしましょう。

なお、このお話の続きを知っている人は、友だちの発表を聞いていきましょう。

【話し合い】

感想・意見を発表しましょう。

【小見出し】

【表現読み】

表現読みで、物語の初めからここまでを、ゆっくりといろいろなことを思い出しながら読んでみましょう。すわったままで何回も読みます。

その明くる日も、ごんは、くりを持って、兵十のうちへ出かけました。兵十

ここでも、南吉の元の文

では「なや」となっている。

は ^①物置で ^②なわをなつていました。それで、ごんは、うちのうら口から、こつ

わらなどをねじり合わせて一本のなわにする。

そり中へ りました。

その時、兵十は、ふと顔を上げました。と、きつねがうちの中へ つたでは
ありませんか。こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、また
いたずらをしに来たな。

このかしよは、南吉の元

の文では「ちようどなや

にかけてあった火なわ

じゅう」となっている。

昔の鉄ぼう。なわに火をつけて

使うのでこのように呼ばれた。

「ようし。」

兵十は立ち上がって、 ^③なやにかけてある ^④火なわじゅうを取って、火薬をつ

めました。そして、足音をしのばせて近よって、今戸口を出ようとするとごんを、

ドンと、うちました。ごんは、ばたりとたおれました。

昔の家には、ゆかが土になっている部分があった。その部屋を土間と言う。

兵十はかけよってきました。うちの中を見ると、^⑤土間どまにくりがかためて置い

てあるのが、目につきました。

「おや。」

と、兵十は、びっくりして、ごんに目を落としました。

「ごん、^⑥おまいおまえだったのか。いつもくりをくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は火なわじゅうをばたりと、とり落としました。青いけむりが、まだ、

つつ口から細く出ていました。

【音読】

立ちどまり⑩をいつもと同じように音読しましょう。

【話し合い】

ごんは、「ぐったりと目をつぶったまま、うなずき」ます。
兵十は、「火なわじゅうをばたりと、とり落とし」ます。この
ごんと兵十について、あなたはどのように思いますか。

発表するときには、「何々のところで」というように文を
読んでから発表しましょう。

また、友だちの発表を聞いて、自分が思ったことや意見も
たくさん言うようにしましょう。

その時は、「**だれだれさんが言った何々のことで**」と言って
から、自分の思ったことや意見を言うようにしましょう。

【話し合い】

感想・意見を発表し合いましょう。

【小見出し】

【表現読み】

立ちどまり⑩の表現読みをしましょう。初めは立って読み、すわって2回読みましょう。

その後は、物語の初めから何回も読みましょう。

「全文感想・意見」と「^{ふく}副題」つけ

このお話を読み終えるにあたって、「全文感想・意見」と「副題」つけをしましょう。

「全文感想・意見」では、このお話全体をふり返って自分の考えをまとめます。この「全文感想・意見」の場合も、これまでの「感想・意見」の時と同じように、お話のあらすじを書くではありません。『ごんぎつね』を読み終えて、自分が最も言いたいと思ったこと、大切だと考えたこと、心を動かされたことなどをテーマにします。

ところで、この「全文感想・意見」にも題をつけますが、その題をそのまま『ごんぎつね』の「副題」とします。副題は、少し長めに書いて、その副題を読めば「全文感想・意見」の内ようがわかるようにします。副題は、「小見出し」と同じように、[・]文で書くとよいでしょう。

副題付きの「全文感想・意見」が書けたら、友だち同士で読み合いましょう。その後、友だちの「全文感想・意見」について、自分の感想や意見を書きましょう。(用紙は後で先生からいただきます。66 ページ)

『さんまのね』を読んで
名前

副題…

名編()

()

このテキストに出てきた4年生の漢字(1)

漢字	出てくるページ		説明の中の言葉	物語の中の言葉
	説明	物語		
席	1		出席番号	
初	1		まず初めに	
例	1		例えば 例(れい)	
約	2		約束	
束	2		約束	
変	2	46	話題を変えたい	変なこと
別	2		別のこと	
残	2		心に残った	
戦	3		ちょう戦する	
種	6	10	種類 菜種	
類	6		種類	
加	6	50	書き加える	加助
続	9	17	続き	雨がふり続く
菜	9	10	菜種	
辺		10		辺りの村
散		10		ほり散らす
良	15		良い点	
必	15		必要	
要	15		必要	

このテキストに出てきた4年生の漢字(2)

漢字	出てくるページ		説明の中の言葉	物語の中の言葉
	説明	物語		
兵		20		兵十
置	24	21	土手に置く	土手に置く
関	24		関係づけて	
特	25		特に	
熱	31		熱する	
輪	31		いくつもの輪	
折		36		ふみ折る
位		36		位はい
得	40		なっ得する	
積		42		かごを積む
松		47		松たけ
側		50		道のかた側
議		50		不思議
副	63		副題	

【感想】

名前_____

この勉強は、楽しかったですか。下のア～オに○をつけましょう。

ア たいへん楽しかった

イ 楽しかった

ウ 楽しくもつまらなくもなかった

エ 楽しくなかった

オ 全ぜん楽しくなかった

主な研究文献

- 「今から始める一読総合法」(児童言語研究会 編 一光社)
- 「一読総合法入門」(児童言語研究会 編 明治図書)
- 「新・一読総合法入門」(児童言語研究会 著 一光社)
- 「国語教育の過去・現在・未来像」(大木正之 編著 一光社)
- 「小学校の教室から文学の授業を問う」(三輪民子 著 一光社)
- 「一読総合法の実践入門 その系統的指導」(林進治 著 一光社)
- 「一読総合法 読みの指導 高学年編」
(大久保忠利・小林喜三男・大木正之 編 大明堂発行)
- 「文芸学入門」(西郷竹彦文芸教育著作集 2 明治図書)
- 「文芸教育」82号(2006年春 文芸教育研究協議会編集 新読書社)
- 「新訂文学読本 はぐるま 指導の手引」(部落問題研究所 編)
- 「国語の授業」誌 No.21 (1977年8月 児童言語研究会 編集 一光社)
- 「国語の授業」誌 No.56 (1983年6月 児童言語研究会 編集 一光社)
- 「国語教育評論」10号(大西忠治 / 科学的「読み」の授業研究会 明治図書)
- 「新美南吉」(新美南吉記念館 編集・発行)
- 「ごんぎつね」(新美南吉 作 いもとようこ 絵 金の星社)
- 教育出版 2005年度版 4年国語教科書
- 光村図書 2005年度版 4年国語教科書

むかし、徳川様がお治めになつてゐられた頃に、中山に、小さなお城があつて、中山様と云ふお殿さまが、少しの家来と住んでゐられました。

その頃、中山から少し離れた山の中に、権狐と云ふ狐がゐました。権狐は、一人ぼつちの小さな狐で、いさぎのいさぎの多い繁つた所に、洞を作つて、その中に住んでゐました。そして、夜でも昼でも、洞を出て来て悪戯ばかりしました。畑へ行つて、芋を掘つたり、菜種殻に火をつけたり、百姓家の背戸につるしてある唐辛子をとつて来たりしました。

それは或秋のことでした。二三日雨がふりつゞいて、権狐は、外へ出たくてたまらないのをがまんして、洞穴の中にかゝんでゐました。雨があがると、権狐はすぐ洞を出ました。空はからつとはれてゐて、百舌鳥の声がけたましく、ひゞいてゐました。

権狐は、背戸川の堤に来ました。ちがやの穂には、まだ雨のしづくがついて、光つてゐました。背戸川はいつも水の少ない川ですが、二三日の雨で、水がどつと増してゐました。黄色く濁つた水が、いつもは水につかつてゐない所の芒や、萩の木を横に倒しながら、どンドン川下へ、流れて行きました。権狐も、川下へ、ばちやばちやと、ぬかるみを歩いて行きました。

ふと見ると、川の中に人がゐて何かやつてゐます。権狐は、見つからない様に、そつと草の深い方へ歩いて行つて、其処からそちらを見ました。

「兵十だな。」

と権狐は思ひました。

兵十は、ぬれた黒い着物を着て、腰から下を川水にひたしながら、川の中で、はりきりと云ふ、魚をとる網をゆすぶつてみました。鉢巻きをした顔の横に、円い萩の葉が一枚、大きな黒子みたいにはりついてみました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一番うしろの、袋の様になつた所を水の中から持ちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、木片などが、もぢやもぢやしてゐましたが、所々、白いものが見えました。それは、太いうなぎの腹や、大きなきすの腹でした。兵十は、魚籠の中へ、ごみも一緒に、その鰻やきすを入れました。そして又、袋の口を縛つて、水の中に入れました。

兵十は魚籠を持つて川から上りました。そして、魚籠をそこに置くと、着物の端から、ポトポトと雫を落しながら、川上の方へ何か見に行きました。

兵十がゐなくなると、権狐はびよいと草の中からとび出して行きました。魚籠には蓋がなかつたので、中に何があるか、わけなく見えました。権狐は、ふといたづら心が出て、魚籠の中の魚を拾ひ出して、みんなはりきり網より下の川の中へほりこみました。どの魚も、「とぼん！」と音を立てながら、にごつた水の中に見えなくなりました。一番お終ひに、あの太い鰻を掴まうとしましたが、この鰻はぬるぬるして、ちつとも権狐の手には掴まりません。権狐は一生懸命になつて、鰻をつかまうとしました。遂々、権狐は、頭を魚籠の中につゝ込んで、鰻の頭をくわへました。鰻は、「キユツ」と云つて、権狐の首にまきつきました。その時兵十の聲が、

「このぬすと狐めが！」と、すぐ側でどなりました。

権狐はとびあがりました。鰻をすてゝ逃げようと思いました。けれど鰻は、権狐の首にまきついてゐてはなれません。権狐はそのまま、横つとびにとんで、自分の洞穴の方へ逃げました。

洞穴近くの、はんの木の下でふり返つて見ましたが、兵十は追つて来ませんでした。

権狐は、ほつとして鰻を首から離して、洞の入口の、いささぎの葉の上のせて置いて洞の中にはいりました。鰻のつるつるしたはらは、秋のぬくたい日光にさらされて、白く光つてゐました。

二

十日程たつて、権狐が、弥助と云ふお百姓の家の背戸を通りかゝると、その無花果の木のかげで、弥助の妻が、おはぐろで歯を黒く染めてゐました。

鍛冶屋の新兵工の家の背戸を通ると、新兵工の妻が、髪を梳つてゐました。

権狐は、

「村に何かあるんだな。」と思ひました。「一体、何だらう、秋祭だらうか。でも、秋祭なら、太鼓や笛の音が、しさうなものだ。そして第一、お宮にのぼりが立つからすぐ分る。」

こんな事を考へ乍らやつて来ると、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前に来ました。兵十の小さな、これはかけた家の中に、大勢の人が這入つてゐました。腰に手拭をさげて、常とは好い着物を着た人達が、表の、かまどで火をくべてゐました。

大きな、はそれの中では、何かぐつぐつ煮えてゐました。

「あゝ、葬式だ。」

権狐はさう思ひました。こんな事は葬式の時だけでしたから、権狐にすぐ解りました。

「それでは誰が死んだんだらう。」とふと権狐は考へました。

けれど、いつまでもそんな所にゐて、見つかつては大変ですから、権狐は、兵十の家の前をこつそり去つて行きました。

お正午がすぎると、権狐は、お墓へ行つて六地藏さんのかげに隠れてみました。いい日和で、お城の屋根瓦が光つてゐました。お墓には、彼岸花が、赤いにしきの様に咲いてゐました。

さつきから、村の方で、

「カーン、カーン」と鐘が鳴つてゐました。葬式の出る合図でした。

やがて、墓地の方へ、やつて来る葬列の白い着物が、ちらちら見え始めました。鐘の音はやんで了ひました。話声が近くなりました。

葬列は墓地の方へ這入つて来ました。人々が通つたあと、彼岸花は折れてゐました。

権狐はのびあがつて見ました。

兵十が、白い袴をつけて、位牌を捧げてゐました。いつものさつま芋みたいに元氣のいい顔が、何だかしをれてゐました。

「それでは、死んだのは、兵十のおつ母だ。」

権狐はさう思ひながら、六地藏さんのかげへ、頭をひつこめました。

その夜、権狐は、洞穴の中で考へてゐました。

「兵十のおつ母は、床にふせてゐて、鰻が喰べたいと云つたに違ひない。それで兵十は、はりきり網を持ち出して、鰻をとらまへた。所が、自分が悪戯して、鰻をとつて来て了つた。だから兵十は、おつ母に鰻を喰べさせる事が出来なかつた。それでおつ母は、死んぢやつたに違ひない。鰻が喰べたい、鰻が喰べたいと云ひながら、死んぢやつたに違ひない。あんな悪戯をしなけりやよかつたな。」

こほろぎが、ころろ、ころろと、洞穴の入口で時々鳴きました。

兵十は、赤い井戸の所で、麦を研いでみました。兵十は今まで、おつ母と二人きりで、貧しい生活をしてゐたので、おつ母が死んで了ふともう一人ぼつちでした。

「俺と同じ様に一人ぼつちだ」

兵十が麦を研いでるのを、こつちの納屋の後から見えてゐた権狐はさう思ひました。

権狐は、納屋のかげから、あちらの方へ行かうとすると、どこかで、鯛を売る声がありました。

「鯛のだらやす」。いわしだ。」

権狐は、元気のいゝ声のする方へ走つて行きました。芋畑の中を。

弥助のおかみさんが、背戸口から、

「鯛を、くれ。」と云ひました。鯛売は、鯛のはいつた車を、道の横に置いて、ぴかぴか光る鯛を両手で掴んで、弥助の家の中へ持つて行きました。そのひまに、権狐は、車の中から、五六匹の鯛をかき出して、また、もと来た方へ駆けだしました。そして、兵十の家の背戸口から、家の中へ投げこんで、洞穴へ一目散にはしりました。はんの木ので立ち止つて、ふりかへつて見ると、兵十が、まだ、井戸の所で麦をといでるのが小さく見えました。権狐は、何か好い事をした様に思へました。

次の日には、権狐は山へ行つて、栗の実を拾つて来ました。それを持つて、兵十の家へ行きました。背戸口から覗いて見ると、丁度お正午だったので、兵十はお正午飯の所でした。兵十は茶碗を持つたまゝ、ぼんやりと考へてゐました。

変な事には、兵十の頬べたに、擦り傷がついてゐました。どうしたんだらうと権狐が思つてゐると、兵十が独

) 語を云ひました。

「いくら考へても分らない。一体誰が、鯛なんかを、俺の家へほりこんで行つたんだらう。お蔭で俺は、盗人と思はれて、あの鯛屋に、ひどい目に合はされた。」

まだぶつぶつ云つてゐました。

権狐は、これはしまつたと思ひました。可哀さうに、兵十は、鯛屋にひどい目に合はされて、あんな頬ぺたの傷までつけられたんだな―。

権狐は、そーつと納屋の方へまわつて、納屋の入口に、持つて来た栗の実を置いて、洞に帰りました。

次の日も次の日も、ずーつと権狐は、栗の実を拾つて来ては、兵十が知らんでるひまに、兵十の家に置いて来ました。栗ばかりではなく、きの子や、薪を持つて行つてやる事もありました。そして権狐は、もう悪戯をしなくなりました。

四

月のいゝ晩に、権狐は、あそびに出ました。中山様のお城の下を通つてすこし行くと、細い往来の向ふから、誰か来る様でした。話声が聞えました。

「チンチロリン チンチロリン」

松虫がどこかその辺で鳴いてゐました。

権狐は、道の片側によつて、ぢつとしてゐました。話声はだんだん近くなりました。それは、兵十と、加助と云ふお百姓の二人でした。

「なあ加助。」と兵十が云ひました。

「ん」

「俺あ、とても不思議なことがあるんだ」

「何が？」

「おつ母が死んでから、誰だか知らんが、俺に栗や、木の子や、何かをくれるんだ。」

「ふーん、だれがくれるんだ？」

「いや、それが解らんだ、知らんでるうちに、置いて行くんだ」

権狐は、二人のあとをついて行きました。

「ほんとかい？」

加助が、いぶかしさうに云ひました。

「ほんどだとも、嘘と思ふなら、あした見に来い、その栗を見せてやるから」

「変だな——」

それなり、二人は黙つて歩いて行きました。

ひよいと、加助が後を見ました。権狐はびくつとして、道ばたに小さくなりました。加助は、何も知らないで、又前を向いて行きました。

吉兵衛と云ふ百姓の家まで来ると、二人はそこへはいつて行きました。

「モク、モクモク、モクモク」と木魚の音がしてゐました。窓の障子にあかりがさしてゐました。そして、大きな坊主頭が、うつつて動いてゐました。権狐は、

「お念仏があるんだな」と思ひました。権狐は井戸の側にしゃがんでゐました。しばらくすると、また三人程、

人がつれだつて吉兵工の家へはいつて行きました。お経を読む声がきこえて来ました。

権狐は、お念仏がすむまで、井戸の側にしやがんでおました。お念仏がすむと、また、兵十と加助は一緒になつて、歸つて行きました。権狐は、二人の話をきかうと思つて、ついて行きました。兵十の影法師をふむで行きました。

中山様のお城の前まで来た時、加助がゆつくり云ひだしました。

「きつと、そりやあ、神様のしわざだ。」

「えつ？」兵十はびつくりして、加助の顔を見ました。

「俺は、あれからずつと考へたが、どう考へても、それや、人間ぢやねえ、神様だ、神様が、お前が一人になつたのを気の毒に思つて栗や、何かをめぐんで下さるんだ」と加助が云ひました。

「さうかなあ。」

「さうだとも。だから、神様に毎日お礼云つたが好い。」

「うん」

権狐は、つまらないなと思ひました。自分が、栗やきのこを持つて行つてやるのに、自分にはお礼云はないで、神様にお礼を云ふなんて。いつそ神様がなけりやいゝのに。

権狐は、神様がうらめしくなりました。

五

その日も権狐は、栗の実を拾つて、兵十の家へ持つて行きました。兵十は、納屋で縄をなつておました。それで権狐は背戸へまわつて、背戸口から中へはいりました。

兵十はふいと顔をあげた時、何だか狐が家の中へはいるのを見とめました。兵十は、あの時の事を思ひ出しま

した。鰻を権狐にとられた事を。きつと今日も、あの権狐が悪戯をしに來たに相違ない。

「ようし！」

兵十は、立ちあがつて、丁度納屋にかけてあつた火繩銃をとつて、火薬をつめました。

そして、聲音をしのばせて行つて、今背戸口から出て来ようとする権狐を

「ドン！」

とうつて了りました。

権狐は、ぼつたり倒れました。兵十はかけよつて來ました。所が兵十は、背戸口に、栗の実が、いつもの様にかためて置いてあるのに眼をとめました。

「おやー。」

兵十は権狐に眼を落しました。

「権、お前だつたのか…、いつも栗をくれたのは。」

権狐は、ぐつたりなつたまゝ、うれしくなりました。兵十は、火繩銃をぼつたり落しました。まだ青い煙が、銃口から細く出てゐました。